

この民話は、沖縄語の題を除き「沖縄語辞典（国立国語研究所編）」の 22 頁のもので、読み音は同書の読み音と同じです。下は沖縄語の表記法の研究結果です。話者島袋盛敏氏は過去の著名人で、同氏の発音は、一部の言葉に現在の一般的口語の発音と異なるものがありますが、話者の発音の通りに書きました。現在の一般的口語の発音で読むときは、「しゃ、しゅ、しよ」は「さ、す、そ」、「ず」は「し」、「ぢ」は「ち」、「せー」は「しえー」と発音して構いません。

をど たみ ぞー はなう ち とうじ はなし
夫ぬ為に胴ぬ鼻押し切っちゃうる妻ぬ話

ぐすーよー うちなー にかしばなし うちなーぐち うはなし
御衆様、くりから沖縄ぬ昔話沖縄口っし御話せーやーんで
うむ
思とーいびーん。

にかししゅい はなし いっぺーちゅ あなぐとうじ
昔首里なかいあたる話やいびーすが、一杯清ら女妻しよーる
ちゅ そ とうじ ちゅ をど とうじ ゆす
っ人ぬ居いびーたん。妻ぬどく清らさぬ、夫ーくぬ妻ぬむしか、余所
に引かさりーる こと ね ーんがやーんでち、あさ ばぬ しわ
ーいしよーいびーたん。

どく しわ ゆい をど ちゅーびよー ちかか しでー
どく心配しゃる故がやいびーたら、くぬ夫ー重病気権て次第
よー 弱いっし、なーや ちゅー あちや ゆ
妻んかい向かて、「なー我んねーうかーしゃど とうぶ
まーしどんせー、また ちとむ や
ぬ妻ぬ言ー分ぬ、「我んねーくまんかい来やる以上 やくまど し
どくる すと い
所、くまやか外ーまーんかいん行ちゃびらん。うんじよーゆーちら
ん ね ーん しわ ぐと ぬー な ぐと
ん無ーん心配しみしよーらん如、早くはしつど成いみせーる如しみ

せーびれー。」んぢ^や言^いびたん。

やいびーずが、くぬ^{をと}夫^{とじ}ー「妻^いぬあん言^いちゃんてーまん、^{どー}胴^しぬ死^しね
ー如何^{ちや}ーが成^なて行^いちゆら分^わからん。あー^{ざんにん}残念^し、死^しじん死^しならん。」

んぢ^い言^いち、^{なだ}涙^うんでーん落^{よーず}とすゆる様子^{よーず}やいびーたん。

あんしゃくと、くぬ^{とじえ}妻^いー、「うんじゅがうり程^{ふどしわ}心配^いしみせーらー、
我^わー覚^{かくく}悟^みう目^み掛^かきやびら。」んぢ^い言^いち、しむから包^{ほーちやーむ}丁^ち持^ちつちっ来^ち、

^{どー}胴^{はなう}ぬ鼻^ち押し切^みつち見^みしやびたん。くぬ^{とじえ}妻^いー影^{かーぎ}姿^{ずがた}んっ人^{ちゆまさ}勝^たい立^たち

^{まさ}勝^{ちゆ}て清^{ちむくる}らさいびーたずが、肝^{みぐど}心^むんまたどつど見^み事^{ぐど}に持^むつちよーる

^{ぬなく}女^{をと}やいびーたん。夫^あーくぬ有^{さまんー}り様^{くる}見^{すく}ち、心^{うたげ}ぬ底^はから疑^はーぬ晴^はり

たくど、うりからー^{くるゆる}心^{しん}許^しち、日^ひやくーどぐーど^{びよーち}病^ま気^なん益^なし成^なて、

^{いちめーいちめーか}一枚^は紙^ず剥^はじ捨^すてーんねー、ちゆーちゃん^なはしつど成^なて、快^{くーち}気^ちう

^{いゑ}祝^{ぐど}ーんでーしゆる如^な成^ないびたん。

あんし元^{むど}ぬ体^{から}成^たて見^なちやくど、鼻^{はなう}押し切^ちつちやる妻^{とじ}ぬ影^{かーぎ}ぬ、元^{むど}
ぬ姿^{ずがた}ど比^{くら}びて二^{たみ}目^{んー}とー見^なだらん成^なやびたん。命^{ぬちすく}救^くて呉^{をんじ}たる恩^{をんじ}義^{をんじ}ぬ

ある妻^{とじ}やいびーずが、うりからー粗^{すそー}相^{かる}ん軽^{かる}ーんっし、後^{あと}ぬうんじゅ

みねー、「やー^ら面^{んー}ー見^んだらん。出^いじて行^{なまん}き。今^い出^いじて行^{たでーまん}き。只^た今^た出^たじ

て行^いき。」んぢ^い言^いち、うぬ妻^{とじあー}追^{ほー}ー放^びて、また別^{みーとじ}から新^{みーとじ}妻^{とじ}どめーいび

たん。当^あたい前^{めー}ぬ夫^{をと}どんやれー、胴^{どー}ぬ為^{たみ}に鼻^{はなう}押し切^ちつちやる妻^{とじ}如何^{ちや}

か-ぎが な うむ はくじょー
っさ 影 変わい成てん、ゆくん 思りわどやいびーすが、くぬ薄 情 ぬ

もと まくと うま むきが
夫ー 誠 に思ーらん 男 やいびーたん。

うりから ぐるくにん てがろー 経っち、 じゅーぐ や
が、くぬ薄 情 ぬ 夫ぬ 後妻と 押し連りて 月 眺みしゆす、鼻 押し切っ

ちやる 先妻ぬ うり見ち、「月や 昔 から、変わる 事 無さみ、変わて 行

くむぬや、ふど くくる む うたゆ
くむぬや、人ぬ 心 」んで 言う 歌 詠 なびたん。

しゃくと、ふる ましーむん、なま て
しゃくと、ふる ましーむん、今まで さやか 照てを たる 月 ぬ 只今 播

くむ かんないな くじ はくじょー みーど だ あー
ち曇て、ふでー 雷 鳴い崩りて、うぬ 薄 情 ぬ 夫婦ん 達ぬ 上んかい

かんない うとた う はなし みじら
雷 ぬ だてーん な 音 立てて 落て たんで 話 やいびーん。どーど 珍

しー はなせ
しー 話ー あいびらに。(終)

沖縄文字の発音は沖縄語辞典(国立国語研究所編)に従い以下の通りです。
と = tu、ど = du、て = ti、で = di、く = kwi、く = kwe、ふ = hwi、ふ = hwe、
や = ? ja、ゆ = ? ju、あ = ? wi、ん = ? N、い = ' i、を = ' u、ち = ç i

話の中の言葉の「晩(ばん)、以上(いじょー)」は日本語がそのまま入ったもので、
沖縄語に置き換えるとすれば、例えば、「晩(ばん)」は「夕(ゆ)さ」、「以上(いじょー)」
は「上(あー)」などが相当すると思います。「詠(ゆ)なびたん」は話者の言
い方です。現代の口語では「詠(ゆ)まびたん」が普通です。「死(し)ぬん」は卑意が
あるので、普通は「まーすん」を使います。ここでは自分の死のことを言っているので、
よろしいかと思えます。

(参考) 前掲辞典 22 頁より
夫のために鼻を切った女の話

皆さま、これから沖縄の昔話を沖縄弁でお話してはとっております。
むかし首里にあった話ですが、大そう美しい女を妻にしている人がいました。妻があまり

きれいなので、夫はこの妻がもしかよそに引かれることがないかしらと、朝も晩もいつも心配ばかりしていました。

あまり心配したせいでしょうか、この夫は重い病気にかかって次第に弱って、もはやきょうかあすかというほど危なくなりましたので、妻に向かって、「もうわたしはとても危ない。おまえはわたしが死んでしまえばまた夫を持つだろうな。」と言いました。するとこの妻が言うには、「わたしはここ(夫のところ)に来た以上は、こここそが死にどころ(です)。ここよりほかはどこにも行きません。あなたはつまらない心配をなさらないで、早く丈夫におなりになるようなさいませ。」と言いました。

ですがこの夫は、「妻がそう言ったところで、自分が死ねばどうなっていくかわからない。ああ残念、死んでも死にきれない。」と言って涙なども落とすようすでした。

するとこの妻は、「あなたがそれほど心配なさるなら、わたしの覚悟をお目にかけてみましょう。」と言って、台所から包丁を持って来て自分の鼻を切って見せました。この妻は容姿も人にまさり、たちまさって美しかったのですが、心もまた大変りっぱにもっている女でした。夫はこのありさまを見て心の底から疑いが晴れたので、それからは安心して日増しに病気もよくなって、一枚一枚紙をはぎ捨てるようにたちまち元気になって、快気祝いなどをするようになりました。

そうして元の体になって見たところ、鼻を切った妻の顔立ちが、元の姿と比べて二目とは見られなくなりました。命を救ってくれた恩義のある妻ですが、それからは粗末にし軽んじてあげくのはてには、「おまえの顔は見られない。出て行け。いま出て行け。たったいま出て行け。」と言ってその妻を追い払って、またほかから新しい妻をめとりました。普通の夫であるならば、自分のために鼻を切った妻を、いくら面変わりしてもかえって思うべきなのですが、この薄情な夫はまったく考えられない(ような)男でした。

それから五、六年とか経って十五夜だったのだそうですが、この薄情な夫が後妻と連れだって月見をするのを、鼻を切った先妻がそれを見て、「月は昔から変わることがない。変わって行くものは人の心」という歌を詠みました。

すると、不思議なことに、いままでさやかに照っていた月がにわかにかき曇って、雷が鳴りひびいてその薄情な夫婦の上に雷が大きな音を立てて落ちたという話です。たいへん珍しい話ではありませんか。(終)